

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 27 日現在

機関番号：72644

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720257

研究課題名（和文）江戸時代の幕府・朝廷財政と商人資本

研究課題名（英文）Relationship of Tokugawa shogunate, the court of emperor and trading capitals in the early modern japan

研究代表者

村 和明 (MURA Kazuaki)

公益財団法人三井文庫・社会経済史研究室・研究員

研究者番号：70563534

研究成果の概要（和文）：

日本近世史における将軍・天皇の関係をめぐる政治史、商業史、京都の都市史など、複数の高度に発達した専門領域が結節する領域として、幕府・朝廷と商人の関係を抽出し、東京・大阪・京都を中心に史料調査を実施し、御用商人や財政担当部局の史料を中心に収集し、諸領域の総合化に向けた論点を整理した。

研究成果の概要（英文）：

Firstly, I extract a main theme, relationship of Tokugawa shogunate, the court of emperor and trading capitals in the early modern japan. It is an expectable theme to aim at synthesis of several important domains of historical study about this era.

Secondly, I investigate a distribution of historical records about this theme, and collect important records by photography, a copy, or other means, mainly in Tokyo, Osaka, and Kyoto.

Finally, I arrange these records and create a fundamental database. By this work, I acquired the key synthesizing several important domains of historical study about the early modern Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：経済史、商業史、財政史、天皇論、史料論

1. 研究開始当初の背景

現在の日本近世史においては、歴史資料の開拓・蓄積の進展と、各分野における個別研

究の展開が必然的にもたらす結果として、個別細分化が深刻化する状況にあることは、しばしば指摘される場所である。本研究と関

わりのある研究分野として、①近世商業史、およびそれに関連する江戸幕府の政策史、②江戸幕府財政史、③近世天皇・朝廷論、④京都都市論、などがあるが、いずれも精緻な研究成果が蓄積されてきた分野であり、そのため逆に、おのおのの知見を集約し、横断的な視野から分析を行うことは次第に困難となりつつある。こうした基本的な趨勢は、事業期間が終了した現在でも変わるところはない。

研究代表者の従来の研究歴、および職場環境は、幸いにして上記のような複数の分野にまたがる史料を収集・分析し、研究するのに適したものであった。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、上記のような複数の分野の成果を総合する方法論を探り、近世国家、伝統的権威、商人資本、巨大都市の総合的・包括的な把握をめざすための足がかりを得ることにあつた。そのために、おのおの豊富な研究蓄積をもつ複数の研究分野の結節点にあたる具体的な領域を抽出し、これに関する文献や歴史資料を収集し、基礎的な分析を行い、総合的・横断的な把握にいたる足がかりを得ようとした。

3. 研究の方法

上記の目的を追求するために、まずこれらの分野の結節点として、江戸幕府の上方における財政を統括する行政機構、およびそこから恒常的に財政支援をうけた朝廷と、商人たちが「御用」などを通じて取り結んだ関係に着目した。これに関わる基礎的な研究文献・歴史資料を収集することから始める必要があつたが、一般的にいつて、日本近世の歴史資料は、前近代史としては極めて豊富な量が現存していることが知られている。したがって、江戸幕府・朝廷・商人が残した歴史資料

群についても、まず関連分野の基礎的な研究文献や、資料保存機関や自治体の刊行する資料目録の収集を通じて必要な資料を探索・抽出した。ついで、該当機関に出張、撮影・複写によって歴史資料を収集した。収集した資料は最終的にはデジタル画像データに加工して整理・蓄積し、基礎的な情報をデータベースに整理した。

4. 研究成果

本研究では、主として東京・京都において史料調査を実施し、歴史資料を収集した。朝廷の上皇や女院の御所の財政を担い、商人と接触のあつた部局の公記録や、朝廷の御用商人として活動した家の史料などを収集することができた。

上記を踏まえ、江戸時代の幕府・朝廷、巨大商人資本に関する研究知見を総合化する方策を検討し、朝廷財政、幕府財政、商業金融の結節点として、いくつかの検討すべき論点を得た。以下に列記する。

(1) 御用商人の時期的変化

まずは、朝廷御用商人の時期的変動である。虎屋文庫所蔵史料から、元禄期（17世紀末）の朝廷御用商人の一覧が明らかになる。三井文庫所蔵史料からは、同様にして安永期（18世紀後期）の御所役人処罰事件前後の顔ぶれを知ることができた。この際、数百人にのぼる商人が処罰されたと言われており、かなりの顔ぶれが入れ替わつたと予想される。これ以降の時期については、朝廷の勝手方（同時代、「表」「奥」に対し、「口向」と呼称される）の最上位である御所の執次の公日記にみえる。18世紀半ばから19世紀半ばまで、天皇の御所の記録（宮内庁書陵部蔵「執次詰所日記」）71冊、上皇の御所の記録（同「上皇御所詰所日記」）58冊がともに残っているが、ここには御用商人が代替わりの際などに挨拶に参上した際の記事が記されている。朝廷

におけるより実務レベルの記録はごく少ないが、18世紀末の女院御所の記録である「御賄所日記」が1冊、19世紀の上皇御所の記録である「洞中御勘定日記」（宮内庁書陵部蔵）が数冊残っている。中でも「執次詰所日記」は、他にも豊富な内容をもつ分、非常に膨大であって、全体から商人の名を抽出するには至らなかったが、必要な労力を投入することで、主要な御用商人の変遷は、これらによりおよそ明らかにしうる見通しが得られた。

幕末には、また大きく情勢が変化する。周知のように幕府の権威が失墜し、朝廷の威信が高まり、ついには薩長を中心とする維新政府へと急激な政権の交代が発生するが、「浪花漬献上発端より之始末日記」（大坂府立中之島図書館蔵・玄武堂文書）などに、それに伴って、新たな朝廷・維新政府の御用を獲得しようと、公家らを仲立ちに運動する商人が現れることがみえる。政治変動が新たな商機を生むと考えられたのであろう。

（2）幕府御用と朝廷御用の関連性。

続いて、（1）にも関連する、幕府御用と朝廷御用の相関性と、その背景となる幕府と朝廷財政の関係である。たとえば元禄期の三井は、既に請け負っていた幕府の呉服御用に加え、新たに幕府勘定所の為替御用を請け負っているが、これとほぼ同時期に御所の両替御用も請け負っており、両者は連動していたと理解される。これに加え、三井の親族が、ほぼ同時期に御所の呉服御用を勤め、後水尾院を中心とする文化活動（いわゆる「寛永文化」）にも関わっていることがわかり、これらの相関性が注目される。

これには、幕府財政と朝廷財政の関係の問題が深く関わってくる。いわゆる朝廷財政については、事実上、幕府が保障する財源によっており、さらに安永期に大規模な担当者が処罰された後、幕府の勘定所が進出すること

が最近指摘された。このような、幕府の財源および財務官僚と朝廷の関わりの変化は、幕府御用と朝廷御用の相関性にも影響を与えると予想され、（1）に述べた時期的変化の背景となると考えられる。京都の商人・町人と朝廷・幕府の関わりに、幕府と朝廷をめぐる政治的・財政的動向が深く関わっているといえよう。

（3）画期としての徳川和子

続いて、（1）（2）に関わる具体的な政治的事件として、将軍の娘・天皇の妻であった徳川和子（東福門院）の存在が重要である。和子に付けられた幕臣の寛永期の業務日誌である「大内日記」を詳しくみると、和子の御所の会計は幕府財政の枠内にあり、天皇・院を大きく上回る巨額の金銀や米が動き、これを彼女に付けられた多人数の幕臣たちが管理し、また御用商人として著名な呉服所後藤家が関わっていることも明らかとなった。江戸幕府成立期には、朝廷や公家の領地の支配に幕府が次第に介入するようになっていくとされており、ここからみて、和子の輿入れおよびその死が、（1）（2）に関して大きな事件であったことが推測できる。徳川和子のような将軍家に直接連なる人間については、幕臣の集団が附属して京都に常駐するとともに、膨大な幕府の資金が流れ込んでいた。彼女とその附属の人員は、幕府の出先機関であり、巨大な消費者であったのみならず、彼女への贈答品も大きな需要をもたらしていたはずである。和子の輿入れと死という問題は、幕政・幕府財政、幕府と朝廷の関係、京都・商人が交わり、近世におけるおのおのの関係が規定される前提となった。

3年間にわたる助成事業により、上記のような論点を煮詰めることができた。これらをさらに実証的に追求していくことで、幕政史、朝幕関係史、商業史、都市史の蓄積を包括的

に統合する成果が得られるものと期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計1件)

①村和明、近世朝廷の制度化と幕府、日本史研究、査読有、618号、2014、掲載頁未定

〔学会発表〕 (計1件)

①村和明、近世朝廷の制度化と幕府、日本史研究会大会、2013年10月13日、京都産業大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村 和明 (MURA Kazuaki)

研究者番号：70563534

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：